思い出に残る観光経験

○林幸史¹・藤原武弘²

(¹大阪国際大学人間科学部・²関西学院大学社会学部)

キーワード：観光行動、観光経験、思い出

A memorable tourism experience.

Yoshifumi HAYASHI¹, and Takehiro FUJIHARA²

(¹Faculty of Human Sciences, Osaka International Univ., ² School of Sociology, Kwansei Gakuin Univ.)

Key Words: tourist behavior, tourist experience, memory

目 的

本研究の目的は、思い出に残る観光経験の特徴を明らかにするとともに、経験内容と過去の旅行経験数との関連を明らかにすることである。ここでの観光経験とは、訪問先での見聞や体験の具体的内容のことである。

思い出に残る観光経験は、数ある経験の中から選択されるものであるため、個人の評価が反映されたものであるだけでなく(Kim, Ritchie & McCormick, 2012)、次の旅行の意思決定にも影響を及ぼすとして重要視されている(Braun-LaTour, Grinley & Loftus, 2006; Kozak, 2001)。

思い出に残る観光経験に関する初期の研究では、個人の観光経験の中でも最も良かった経験と悪かった経験についての自由記述を分類した研究がある(Pearce & Caltabiano, 1983; Pearce & Moscardo, 1985)。これらの研究では、観光経験の内容をMaslow(1943)の5次元欲求と対応させたところ、経験回数が少ない人は、生理的欲求に関する記述が多く、経験回数が多い人は、所属と愛や自己実現欲求に関する記述が多いことが認められた。本研究では、これについてテキストマイニングを用いて数量的な分析を試みる。

方 法

調査対象者

調査協力者は593名(男性310名、女性283名)であり、平均年齢は44.92歳($SD=13.45$)であった。

調査手続き

株式会社クロス・マーケティングのモニターの中から性別と年代によって層化抽出を行い、インターネット調査法で調査を実施した。調査時期は2011年10月であった。

調査内容

1).過去の旅行経験について

これまで国内旅行で訪れた都道府県の数、これまで海外旅行で訪れた国の数について尋ねた。

2).思い出に残る観光経験について

これまでの観光経験の中で、最も良かった経験と最も悪かった経験について自由記述での回答を求めた。

結 果

最も良かった観光経験の特徴を明らかにするために、自由記述の内容について形態素解析を実施した。高頻度の語句と過去の旅行経験数との対応分析を実施した結果が図1である。

考 察

最も良かった観光経験の内容で高頻度を示した語の多くは、佐々木(2000)が提唱する5次元特性のうち4つの特性との対応づけが可能である。具体的に述べると、「温泉」「ビーチリゾート」「ハワイ」は緊張解消、「食事」「おいしい」「マリンレジャー」「有名人」「ディズニーリゾート」は娯楽追求、「人」「家族」「友人」「子ども」「親」「恋人」は関係強化、「文化」「史跡」「歴史」「美術館」は知識増進といったように対応づけられる。また、経験内容は、過去の旅行経験数との関連が認められた。具体的に述べると、低年層と中年層/経験低群では、緊張解消と娯楽追求に関わる経験が、高年層/経験低群では、関係強化に関わる経験が、中年層/経験高群と高年層/経験高群では、知識増進に関わる経験が、それぞれ一番の思い出として選択される傾向にあった。年齢と旅行経験を重ねることによって、よい観光経験は娯楽追求→関係強化→知識増進と変化することが伺え、旅行経験を積むことで、旅の楽しみ方が情緒的、感覚的なものから、認知的なものへと変化する可能性を示唆している。このような結果は、旅行経験を積むことで、演出性の高い観光経験よりも本物性の高い観光経験を求めるようになるというPearce & Moscardo(1985)の知見とも一致するものである。

図 1. よい観光経験の対応分析